

謎解き 浮世絵とゴッホ 編

《ジャポネズリー 梅の開花》

《ジャポネズリー 梅の開花》（1887年、ファン・ゴッホ美術館所蔵）も、広重の模写作品として、国内外で広く認知されています。

ゴッホは、空の赤と地面の緑の対比を原本より強め、画面周囲を赤茶色の枠で囲みました。また、その枠には他の版画から拾ったとみられる「新吉原」、「大黒屋錦木江戸町」などの文字が書き入れられています。北斎や広重は洋風画から西洋的遠近法による空間の深さを学び、幾何学的な構図と東洋画の伝統である線描によって図を再構築しましたが、ゴッホはそうやって洗練された浮世絵をさらに真似ることで、その構図、色彩感覚、線描画法といった描画技術を学んだのでしょう。

原本は『名所江戸百景』の一枚で、江戸で高い人気を誇る梅見の名所地であった「亀戸の梅屋敷」の情景を描いた作品です。梅の木の幹を画面中央に大胆に配し、香り立つような梅の花がその枝先に咲き誇っています。画面奥には梅見をおこなう民衆たちの姿が見えます。画面中央の梅の木は超近景的とも言え、中景としては梅屋敷に咲く梅の木々が、遠景には梅見をする見物人たちが配され、鑑賞者の視線を手前から奥へと導く仕掛けとなっています。広重は遠近景の絶妙な面積配分と画面上部の開放的な空間構成によって、大胆でありながら軽妙感のある印象的な画面を生み出しており、見る者を惹きつけます。日本人が西洋画を学ぶ過程で取り入れられた極端な遠小近大構図は、次代の洋風画、さらには北斎や広重らの風景版画に受け継がれ、やがてはそれらを介してマネやゴッホら西欧近代の画家たちにまで影響を及ぼすことになりました。

本作のもうひとつの見どころは、優れた色彩表現です。画面上部の鮮やかな朱色の空から緑色の地面へと色彩を劇的に変化させながらも、中央の薄桃色が階調の受け渡しを担っており、見た目の印象は自然で心地良い。画面の主役である梅の木にはグラデーションをかけた黒灰色を用いて画面全体を引き締め、限られた色数で完成度の高い色彩構成を実現しています。

浮世絵と後期印象派絵画にはこのように密接な関連性がありますが、特別な機会がない限り、両者を並べて鑑賞することは難しいのですが、来年の展示では、クローン文化財の真骨頂ともいえる広重作品とゴッホ作品の質感を伴った高精細複製による比較展示を予定しています。

展示予定

フィンセント・ファン・ゴッホ 《ジャポネズリー 雨の大橋》

歌川広重 《名所江戸百景 亀戸梅屋敷》



歌川広重《名所江戸百景 亀戸梅屋敷》